

OKoTaC 通信

オコタック

2016年5月10日発行

NO.28



P 2 NPO活動報告(1)

『外国にルーツがあり、特別支援が必要な子どもへの日本語指導を考える』

P 3 地域の子ども支援教室から㉔

こどもにほんごプロジェクト『とよなかこども日本語教室』(豊中市)

P 4 特別寄稿(1)

『ピアにほんごの歩み』③

NPO活動報告(2)

『高校生活オリエンテーション』

P 5 Air Mail メキシコ便り㉔

『渡り蝶・モナルカ蝶』

P 6 みんなの日本語、みんなで NIHONGO! ⑧

『別れと出会い』

P 7 特別寄稿(2)

『ベトナムにほんご事情・フエ便り』①

P 8 総会案内・スタッフ紹介





おおさかこども多文化センター 活動報告(1)

外国にルーツをもつ子どもの教育支援学習会

『外国にルーツがあり、特別支援が必要な子どもへの日本語指導を考える』開催

2月20日(土)、大阪府立市民交流センターなにわに於いて、上記学習会を開催しました。講師の藤川純子さんは、かつて中学校での渡日生徒への日本語指導、JICA ボランティアとしてのブラジル在住等を経て、現在は四日市市の小学校で特別支援学級を担当されています。三重県最大の外国人集住地区にあるこの学校では、外国にルーツのある子どもが全校児童の3分の1を占めているそうですが、渡日生への日本語指導と発達に課題のある子どもへの支援、両方の経験を持つ藤川先生の、現場に根ざした実践的なお話に、37名の参加者は熱心に聴き入り、また後半は活発な意見交換等もおこなわれました。

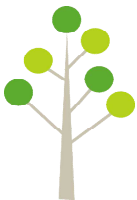
外国にルーツをもつ子どもの場合、日本語獲得の遅さなどを理由に安易に支援学級に入れられている例や、逆に発達に課題があると薄々予想しながらも長年日本語指導教室で対応し続けている例もあるようです。しかし、学習面や行動面で気になる部分が見られて



も、その原因が発達障害にあるのか、言語的なダブルリミテッドにあるのか、もしくは異文化や家庭環境などによる情緒不安定のためなのか…それを特定するのは、診断のための発達検査における日本語理解の問題もあり、日本人以上に困難だといわれています。さらに、もともと発達障害は原因が一つではない可能性もあります。そんな中で、一人ひとりの子どもの力を伸ばす支援のために必要なポイント、それは レベルに合った勉強で「できた！」の成功体験を重ねる大切さ、居場所としての支援学級の意義、子どものプライドを尊重した声かけ、そして気持ちを表現できる言葉を教えてあげることなどなどについて、幅広い視点からお話いただきました。

また、日本語指導の教員には、特別支援の先生ほど支援教育分野の情報やスキルの研修の機会がないので、そのために支援者同士のネットワークづくり・専門家との連携が大切であることを強調されました。そして、外国ルーツの子どもに特別支援教育をおこなう際に配慮すべきこと(母語の発音や文法が日本語習得に影響しうることへの理解など)も指摘されました。特に、日本とは異なる文化を持つ保護者に対し、今おこなっている学習の内容や意義について、そのたびごとに丁寧に説明する必要性、そして、保護者が学校に来やすくするためには子どもをほめることが大事であるというお話は、帰国渡日の子どもたちに関わる私たち皆にとって、大きな気づきとなったと思います。

日本語と発達特性、ダブルのしんどさを持つということは、支援の場所はどこからでなくてはならないということではなく、逆に「ダブルで支援が得られるということだ」という言葉が、とても印象的でした。支援する側の柔軟な対応のもとで、子どもたち自身が学習への意欲を長期にわたって継続できるよう、考えていきたいと思いました。(AN)



学習会に参加して――

(オコタック会員 K.H)

今回は「特別支援が必要な子ども…」とタイトルにはありましたが、結局「特別」なことではなく、日本語指導担当として自分が大切にしたいと思ってきたことを再確認できる学習会となりました。特に、日本語を母語としない子どもの子育てを日本で実際にされていたり、地域で子どもたちや保護者にかかわっていたりする方の切実な思いも聞かせていただき、子どものことや保護者のことをよく知り、ネットワークを大事にしながら、子どもの持っているもの(母語やルーツや思い)をきちんと尊重して信頼関係を結ぶことがやはり大切なのだということがよくわかりました。

また、子どもにとって「必要なこと=いいこと」をできるところでやっていくという、教員の側の緩やかな姿勢が大事という藤川さんのお話が、心にすんと落ちました。ついつい教える側は、「なんでやろ？」と原因探しをしてしまいがちであることに對しても、「(子どもの背景を理解することももちろん大事ですが)原因探しに時間を取られすぎることなく、適切な支援方法探しを！」というお話も納得のいくものでした。加えて、日本語指導担当者や支援学級の担当者が丁寧な指導や信頼関係づくりを個別にする一方で、子どもたち同士のつながりを大事にしていくことが、日本語指導の必要な子どもにとっても大きな力になることも再確認できました。ありがとうございました。



こどもにほんごプロジェクト『とよなかこども日本語教室』（豊中市）



「とよなかこども日本語教室」は、学習に必要な日本語を学ぶ子どものための教室です。とよなか国際交流センター（豊中市）で週3回開催され、豊中市内の公立学校に通う帰国や渡日、日本生まれ／育ちなど、多様な背景をもつ小学生・中学生が通っています。

この活動の特徴は、指導にあたるボランティアの先生方（日本語指導者グループ・とよなか JSL (Japanese for School Life)、以下、「とよなか JSL」）、豊中市教育委員会（以下、委員会）、公益財団法人とよなか国際交流協会（以下、協会）の三者が連携して運営を行っている点にあります。2011年に「学力・生活力につながる日本語指導システムづくり」（一般財団法人自治体国際化協会 地域国際化施策支援特別対策事業）で、委員会と協会が日本語指導者養成に取り組み、とよなか JSL が誕生しました。2012年度からは豊中市協働事業市民提案制度を利用した三者協働の「こどもにほんごプロジェクト」として、4年間活動を続けてきました。市民団体、行政、国際交流協会が関わって、日本語学習を必要とする子どもたちの現状を把握し、必要な支援につなげる仕組みが、徐々に定着してきたと実感しています。

子どもが学習に必要な日本語を習得するには5～7年の期間が必要といわれていますが、日常言語を流暢に話していると、学校の成績が振るわない時に“勉強が苦手な子”としてみなされ、日本語指導を必要とする子どもとはみられない場合もあるようです。しかし、日々の生活で獲得できる日常言語と違い、学習で使う日本語は基礎から教わらないと仕組みは理解できません。それは、あらゆる教科学習につながるものです。例えば、算数で「100－30」という計算はできて、「30円のものを買うのに100円払ったらおつりはいくらでしょう。」などという問題を解くには、言葉を式におきかえる抽象的な考え方が必要となります（注1）。

学習につながる日本語を身につけるには、学ぶ方にも教える方にも、地道な努力が不可欠です。月・木・土曜日、毎回1時間半の授業に通ってくる子どもたちもさることながら、指導にあたっておられるボランティアの先生方の努力と熱意には心を動かされます。授業前の指導計画の立案と授業後のふりかえりを繰り返しながら、毎回より良い指導のあり方を検討し、現在は指導案集の作成にも取り組んでおられます。先生方一人ひとりが、目の前の子どもが学校生活を充実させることができるよう、将来の日本での生活をより豊かなものにできるよう、想いをもって子どもに接しておられます。



「ことば」の獲得を通じて、子どもたちも確実に変化をしていきます。学習への自信が高まる子、自分の気持ちを人に伝えられるようになった子、以前より表情が明るくなり沢山話すようになった子など…。変化は人それぞれですが、「こども日本語教室」に通うことで“本来の自分”を取り戻し、勉強したいと真剣に取り組めるようになった子どもを見ると、日本語学習の重要性を感じられずにはられません。

2016年度、協働事業から提案公募にかわり、応募しているところです。いつまでも、子どもたちにとって最善を模索しつづける事業でありたいと思っています。
(とよなか国際交流協会・山本房代)

注1:「学力・生活力につながる日本語指導のシステムづくり(資料集)」p20, 編集:豊中市教育委員会・(財)とよなか国際交流協会, 2012.1.31 発行(※指導者の田中先生のインタビュー記事より抜粋)

活動場所 : とよなか国際交流センター(予定)
〒560-0026 豊中市玉井町1-1-1-601(エトレとよなか6階)
日時 : 毎週3回
問合せ先 : TEL 06-6843-4343(担当者:トーマス、山本)
E-Mail atoms@a.zaqq.jp



特別寄稿(1) 「ピアにほんご」の歩み ③

村上 自子 (ピアにほんご コーディネーター、おおさかこども多文化センター 理事長)

編集部より

前号では「大阪府日本語教育支援センター(ピアにほんご)」開設までの流れや、その構想について紹介しました。今回は、その後の行政環境の変化に伴う事業内容の変遷や、そこから現在のオコタックが誕生した経緯についてふり返ります。

★ ★ ★

2007年1月、「ピアにほんご」が開設され、府立高校に学ぶ日本語指導の必要な生徒に対する学校生活支援と、その支援方法に戸惑っている各在籍校に対してのサポートが始まりました。さあこれから事業の充実に向けて、帰国・渡日の子どもたちのための様々な構想を実現していこうと思った時……2008年4月、橋下大阪府知事が誕生し、大阪府の財政立て直しの名目ですべての委託事業の見直しがなされました。その結果、府教委が(特)関西国際交流団体協議会に委託していた「ピアにほんご」も、同年7月末でいったんストップしました。9月から委託先が(財)大阪YWCAに替わり、事業費が大幅に減額されて再スタートしました。しかし、「ピアにほんご」の特徴であった、行政・大学研究機関・地域活動団体の連携による研究会(事業の方向性を決める組織)は無くなってしまい、事業内容は、教育サポーターの派遣と、高校生活オリエンテーション(下記参照)、教育サポーター交流会、日本語教育研修会の実施、相談窓口の設置だけになりました。



そしてその後も、少しずつ予算は減額されていき、やがて日本語教育研修会開催もやめざるを得なくなりました。開設当初は外国にルーツのある子どもの包括的支援を目指した「ピアにほんご」が、予算が減額されることにより、ただ教育サポーター派遣のみの事業になりつつありました。府教委の委託先が替わっても継続してコーディネーターをしていた私は、そのことについてとても残念に思っていました。そこで、高校教員や「ピアにほんご」事業関係者、行政の方々に相談して、2010年10月に本来の構想であった「外国にルーツを持つ子どもの教育支援リソースセンター」を実現すべく「NPO法人おおさかこども多文化センター(オコタック)」を立ち上げることになったのです。

中・高校教員、地域の支援者、日本語講師、行政関係者、大学研究者等が発起人メンバーとなり、翌年2月18日にNPO法人の認証を受けました。それ以来オコタックでは、2011年度から本年度も引き続き「ピアにほんご」事業を受託(※)、府立高校に通う帰国・渡日生徒のサポートを続けています。(つづく)

(※)2014年度からは事業担当部署が、府教委の市町村教育室小中学校課から、高等学校課生徒指導グループに変わりました。

.....



おおさかこども多文化センター 活動報告(2)

ピアにほんご『高校生活オリエンテーション』開催

3月26日(土)、府立今宮工科高校で、恒例の「高校生活オリエンテーション」が開催されました。4月から府立高校に入学する外国ルーツの生徒たち25名とその保護者、教員、通訳など、総勢91名が参加したこの催しは、日本の高校生活を送る上で知っておきたい情報を各言語で提供するために、府教委とピアにほんごが、府立外教の協力のもと毎年実施しています。会場では、通訳に手伝ってもらって各種手続きに必要な書類を記入したり、入学後の不安や疑問などを直接府教委の担当者にたずねたりする保護者の姿も多く見られ、このような機会がいかに求められているかということが実感されました。



後半は、この春高校を卒業して大学や専門学校に進んだ3人の先輩から、自身の高校時代の体験談や後輩に対するアドバイスをしてもらいました。日本語や友人関係で悩んだこと、そんな中、尊敬できる恩師に出会えたこと、またこれからの夢などを笑顔で語ってくれる先輩たちの姿は、新入生たちにとって、きっと大きな勇気と刺激を与えてくれたことと思います。(AN)



海外からのたよりをお届けします～

メキシコ便② 「渡り蝶・モナルカ蝶」

(おおさかこども多文化センター会員 金野広美)

メキシコには毎年10月にカナダから約4000キロの道のりを、1ヶ月あまりかけて越冬するためにやってくるモナルカ蝶の自然保護区があります。毎年1億数千羽はやってくるといわれているその場所はメキシコ・シティーから車で約3時間、ミチョアカンにあるアンガングエオの森です。メキシコにいる間に1度は見た方がいいといわれて、クラスメート8人で行こうということになりました。先週同じ場所に行った友人が交通渋滞で7時間かかったと言っていたので、ひょっとしたら、今から行っても保護区は閉まってしまっていて見られないのではないかと、みんな心配しましたが、とにかく行ってみようとして10時を過ぎていましたが出発しました。



すると本当に運がよくて、まったく渋滞がなく1時過ぎには森の入り口に着きました。

たくさんの観光客がうろうろする中で、子どもたちが竹の杖を5ペソ(約50円)で売っています。杖を売っているということは、これが必要になるほどの山道だということ?うーん、一瞬買うかどうか迷いましたが、ここは見栄をはって我慢することにしました。でもインド人のアンドレアと韓国人のテナはすぐに買い求めました。

沿道には食堂や土産物売りの店がずらりと並んでいます。食堂ではマリアッチを演奏する楽団がにぎやかに歌っています。土産物

物が気になりながらも私たちは保護区に急ぎました。そして入り口で35ペソ(約350円)を払い、頂上めざして歩き出しました。そして山道を30分ほど登ると、少しずつ蝶が飛んでいるのが見えてきました。みんな期待に胸ふくらませながら、しんどい山道がんばって登りました。

道は乾燥していてすべりやすく、やっぱり杖を買えばよかったかなと少し後悔しながらも40分ほど登ると、小さな水の流れがあり、いるわ、いるわ何百羽もの蝶が水を飲んでいます。みんな一斉に流れに近づきシャッターをきりました。蝶たちは人が近づいてもまったく動揺することなく悠々と水を飲んでいます。そしてそれからもっと上に20分も登ると、視界が開けて大きな広場になっている場所に着きました。そこではおびただしい数の蝶が空高く飛びまわり、もみの木の枝という枝にたわわにぶら下がっています。蝶の色のオレンジと黒が混ざり合って、まるですべての木が枯れ葉になって、ゆさゆさと揺れているようです。蝶の重みで折れる枝もあるそうで、とにかく一面蝶だらけです。私はこんなに大量の蝶を見たのは初めてだったので、口をついてでてくるのは、ただただ「すごい」という言葉だけ、ほかにはこの光景を形容する言葉が見つかりません。普通は蝶々という、かわいいとか、きれいとかという感想になるのですが、ここまでたくさんいるとそんな言葉はどこかに飛んでしまい、密集する小さな命の凄みすら感じてしまいました。クラスみんなもただ口をあぐりあけて空を仰いでいます。空中を埋め尽くした蝶の乱舞に、言葉もなく立ちつくしているようでした。



モナルカ蝶は学名をオオカバマダラといい、日本でも見られるアゲハチョウの一種です。8月にカナダとアメリカの国境地帯のロッキー山脈を飛び立ち、強風時は羽をたたんでV字にして直風を避け、弱風時は羽を広げて風に乗りながらやってくるそうです。ここミチョアカンにはモナルカ蝶の好物の唐綿(とうわた)があるためはるばる渡ってくるのです。モナルカ蝶はここで冬を過ごしたあと春になると繁殖し、その命を終えます。そして生まれた2代目が3月にカナダへと飛び立ちます。カナダで3代目、4代目と繁殖を続け、5代目がまたメキシコに旅立つというのです。まったく誰も知らない道を4000キロも旅して、必ず同じ場所で冬を過ごすのです。この行程を大昔から寸分たがわず続けているというのですから、ただただ不思議としかいいようがないですね。



みんなの日本語、みんなで NIHONGO ! ⑧

「別れと出会い」

小林悦子（元大阪市立豊崎中学校 帰国した子どもの教育センター校 日本語教室担当）

実は今年3月末で退職することとなり、荷物の片づけをしていると、13年前、日本語教室担当となつてすぐに教えた中国の女の子の作文の翻訳が出てきました。

「…毎日毎日濁った水の中で魚を探っているような生活です。…毎日同じく朝起き、朦朧たる目でとても起きたくありません。…そしてそのままカバンを持って学校に来ますが、何もやることはありません。仕方がないから、中国語で書かれた本を読みます。たまに午前中は日本語教室に行つて勉強しますが、お昼には戻つて、決まつた二人の生徒とご飯を食べます。午後授業をしますがまたやることはありません。家に戻つたらもっと大変です。面白くやれることはありません。ただテレビを見るだけです。…」

これは「私たちの気持ち」という作文集を作るため、生徒全員に自分の母語で作文を書かせて翻訳したものの一つです。

この生徒は来てまだ3か月ぐらいだったと思います。とても真面目で大人しく、中国の生徒が集まっても自分からはあまり話をしないで、ニコニコしながらみんなの話を聞いているようなタイプの女の子でした。日本語の授業でも、真面目に一生懸命取り組んでいて、少しずつですが日本語も使うようになっていました。文化祭の取り組みでクラス合唱する曲を、一緒に歌つて練習したりもしていました。うまくいっていると思っていたので、この作文を読んで彼女の気持ちが分かり、正直ショックでした。



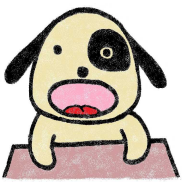
十数年前は今のようにはパソコンやスマホで母国の友達とすぐ話したり、母語で映画やテレビを見たりする環境はなかったもので、彼女のような気持ちになる生徒は多かつたと思います。さらにその上に、中学生になると小学生のように遊びの中で体験的に日本語を覚える機会はありません。特に女の子はおしゃべりを楽しむようになり、日本語を勉強してはいるが、まだまだ十分に話せない生徒にとって、授業時間以上に休み時間が大変だとよく聞きます。

彼女の作文はもちろん在籍校の先生にも伝え、授業での支援、周りの生徒とのコミュニケーションがとれるように取り組んでももらいましたが、結局その生徒はまもなく帰国してしまいました。日本語を勉強している生徒は皆、真剣に日本語を勉強します。こちらにもそれに応えようと一生懸命教えますが、それで生徒の気持ちが分かっているような自己満足に陥っているのだと大いに反省し、彼女に何もできなかったことに後悔したことを覚えています。

今までたくさんの生徒やその生徒に関わる先生、保護者、支援者の方々、いろいろな人に出会いましたが、日本語を教えるというより、私がたくさんのことを教えてもらいました。後悔することも多かつたのですが、つい先日、日本語を教えた中国出身の生徒から、一浪して念願の関西大学に合格したとメールをもらい、その生徒の苦労を思い出し本当にうれしい気持ちになりました。



在職中はほんとうにたくさんの方に助けていただいて、感謝の気持ちでいっぱいです。出会いと別れのこの季節、別れはさびしいけれど、またたくさんのお会いにワクワクしている今日この頃です。



特別寄稿(2) 「ベトナムにほんご事情・フエ便り」①



編集部より

大阪の多文化な子どもへの学習支援教室・サタディクラスでボランティアをしていた内田千景さんが、ベトナムの男子との出会いをきっかけに、ベトナムで日本語を教えたいと、国際交流基金ベトナム第2期日本語パートナーズとして昨年8月、フエに赴任。現地の日本語教師のアシスタントとして、言葉を教え、日本文化を紹介するため活動されています。その様子を3回にわたりレポートしていただきます。

国際交流基金 ベトナム第2期日本語パートナーズ 内田 千景

Xin cha`o ! (シン・チャオ)「こんにちは！」

初めまして、私は内田千景といいます。昨年8月から、ベトナム・フエ市の中学校と高校で、日本語パートナーズとして、生徒たちにベトナム人の先生と一緒に日本語を教えています。日本語パートナーズの仕事は授業のアシストをし、生徒との交流を図り、現地の言語や文化についての学びを深め、ASEAN諸国と日本の架け橋となることが求められているのです。そのため私も日本から持っていったいろんなものを使って日本文化の紹介をしています。

ベトナムでは、小学校が1～5年生まで(5年間)、中学校が6～9年生まで(4年間)、高校が10～12年生まで(3年間)です。ベトナムの中学校と高校には、一部ですが、日本語を第一外国語または第二外国語として導入している学校があり、中学の4年間と高校の3年間、合わせて7年間、日本語を勉強しています。これって、すごいでしょう！もちろん、英語も勉強していますよ。その上、日本語もですからね！ふたつの外国語を学ぶすばらしい生徒たちと、毎日一緒に勉強しているのです。何て幸せなことなのだろうといつも思っています。日本語は難しいけれど、一生懸命勉強している生徒たちの様子を少しでもお伝えしたいと思い、ベトナム・フエからお便りします。



新年、絵馬に願い事を書きましょう！

Phan Sa`o Nam(ファン・サオ・ナム)中学校9年生クラスで、「絵馬」に願い事を書きました。

ベトナムでは、旧正月テト(Tết)を祝います。今年は2月8日～10日、学校は、2月6日～14日までテト休みでした。テト休みに入る前に、日本のお正月の過ごし方についてPPT(パワーポイント)で紹介しました。プロジェクターでスクリーンにおみくじとお守りを映しているときに、私はジャンプしてスクリーンにタッチし、今まさに日本の神社に行っておみくじとお守りをもらってきたような演技をしました。この演出に生徒たちは大喜び。そのあとやった日本のお正月クイズに正解した生徒に、日本から持ってきた神社のおみくじとお守りをあげました。

ベトナムでもお正月、子どもたちは lì xi(リー・シー、お年玉)をもらいますが、私もみんなにお年玉をあげました。日本とベトナムのお正月は似ている点も多いのでとても親近感があります。

日本のお正月について勉強した後は、生徒たちに「絵馬」に願い事を書いてもらいました。9年生は5月に中学校を卒業し、高校受験があるので、私は行きたい高校の合格祈願や将来の夢をぜひ書いてほしいと考えました。今まで勉強してきた日本語で、将来の夢が書けること、それが、少しでも生徒たちの自信につながればいいと思い、絵馬を手渡しました。そして生徒たちの願いが込められた絵馬ができてあがりました。

「神様、今年、どうか生徒一人ひとりの願いがかないますように！」

(次号につづく)



2016年度オコタック総会のお知らせ、特別講演もあります！

NPO 法人おおさか子ども多文化センター(オコタック)の2016年度総会を、下記のように開催いたします。

正会員は総会への参加・議決権、賛助会員は参加権があります。

総会後は、オコタックにふさわしいお話を聞ける機会を設けました。

是非、多くの会員のみなさまに出席していただければと願っています。

記

日時：2016年5月28日(土) 10時00分～12時00分

場所：ヒューライツ大阪セミナー室(下の地図参照)

おおさか子ども多文化センターが入っているビルの同じフロアです

時程：10時00分 総会

2015年度事業報告・決算報告、2016年度事業計画、その他 理事の交代などについて

10時30分～12時00分

特別講演:「教科学習につなげるための内容重視の日本語教材」の開発と実践報告

～年少者の日本語教育の視点から教材使用の具体的方策～

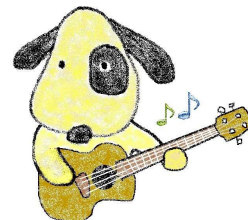
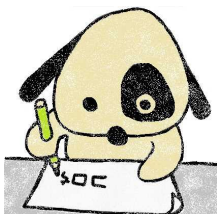
講師：有本 昌代 (大阪府立門真なみはや高校 日本語教員)

内容：教材開発にあたり年少者の日本語教育の視点から重視した点

教材の特徴、教材の使い方、

生徒の作品紹介(作文、ポスター、スピーチなど)、授業のビデオ紹介

* このセミナーは、オコタック会員以外でも、会員と一緒に参加することができます。

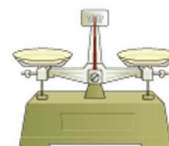


スタッフ紹介(5)

22号より編集部に加わっていただいています。紹介が遅れ申し訳ありませんでした。

井上 泰雄

元大阪市中学校教員です。教科は理科でした。2校目で中国出身生徒に出会い、その後渡日の子どもたちとささやかな取り組みをしてきました。教員生活最後は帰国した子どもの教育センター校勤務、渡日生用教材理科(中1～3年)作成に携わってきました。現在は、週1回 Minami 子ども教室に参加しています。現場しか知らない人間なので、編集会議は、私にとってとても楽しい勉強の場です。どこまでお役に立つかわかりませんが頑張ります。



NPO 法人 おおさか子ども多文化センター (OKoTaC) 代表 村上 自子

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8階

Tel / Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com URL <http://okotac.org>

郵便振替 【記号・番号】00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(ぜいじゅうじゅう))

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824

口座名義『NPO法人 おおさか子ども多文化センター』

(フリガナ: トクヒ) オオサカコドモタブンカセンター)

